

は、医師は患者とその子どもに対してより直接的にアプローチする傾向がみられたが、看護師はそれに加えて、家族や他職種・他部門と協力して介入を行おうとする傾向がより強くみられた。また、子どもの支援のために必要な資源としては、医師は本やパンフレット、資料などのツールを希望しており、看護師やその他の職種は、加えて実践的な演習、事例検討、支援場面の見学を希望する傾向がみられた。

この結果をもとに医療者（特に看護師）を対象として開催した研修・ワークショップ「看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～」における参加者のチャイルドサポートについての認識と介入の現状調査では、参加者の8割以上の参加者がチャイルドケアについては初めての受講であったが、ワークショップの前後で、がん医療における子どもの心理、行動に対する理解が深まっており、その必要性、理解については参加者の全員に行き渡ったと考えられた。また、32名（94%）が「自施設で実施可能なチャイルドケアに関する取り組みの参考になる」としており、臨床現場のニーズに即した内容であったことが推察される。今後も県内の拠点病院や県内小児科病棟をもつスタッフに対して、ケース検討会、勉強会など、チャイルドケアをテーマとした継続的な医療者支援が必要だと言える。

II. 患者（親）および子どもを含めた家族の支援

がんになった親をもつ子ども（小学生）に対する認知行動療法に基づく心理教育プログラム「夏休みキッズ探検隊」の開催と

アンケート調査結果より、子どもについては、平成24年8月および平成25年8月開催のいずれのほとんどの項目で高い評価を得ており、また、イベント介入前後の子どもストレスについても有意に軽減されており、イベントの目的の1つであった「病気や病院について正しく学ぶことにより不安が軽減され、レジリエンスが引き出される」については、ほぼ達成されたと考えられた。

親の評価は、兩年ともに子どもに比して低かったものの、「全体的に今回のイベントは良かった」との評価を得た。上記の子どもとの評価と同様に、親も「子どもが成長したと感じる」「子どものがんに対する不安を和らげることに役立った」と感じており、「子どものいるがん患者の安心に役立った」との評価に結び付いたものと考えられる。

参加した子ども同士が話をする機会が少ない点などを含め、内容の検討しながら今後も継続開催が予定されている。また、がんの親をもたない一般児童についても、がん教育の一環として今後開催することも予定されており、その効果が期待される。

III. 地域への情報発信

平成24年1月市民公開講座「子どものいのち 親のいのち～がん患者・家族を支える～」（来場者100名）、平成25年1月市民公開講座「がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～」（来場者142名）、平成26年1月市民公開講座「つながるいのち～がん医療の現場から～」（来場者221名）と、年々来場者数は増加し、市民公開講座参加後にはもちろんだが、市民公開講座参加前でも子どもに病気について話す必要性について「必要ない」とする

回答はみられなくなった。医療者からのチャイルドサポートの他、教育関係者や保健・福祉関係者からのサポートについても必要との認識は依然高かった。

市民公開講座開催は、がんになった親をもつ子どもへのサポートに対する地域住民の認識を把握すること、がん医療における子どもの現状やそのサポートの必要性を含めた情報発信に効果的であったと考えられ、今後も継続開催が望まれるところである。

以上より、がんになった(子育て世代の)「親」およびその「子ども」を含む「家族」に対して、診断・治療期からの継続的なサポートの提供が必要であると考えられ、その実現のためには、院内においては今後も多職種でのカンファレンスや勉強会での情報共有と啓蒙を進めていく必要があると考えられた。また、そのような支援について病院など一機関(施設)ができることはほんのわずかであるため、教育機関や地域保健機関やなどを含めた様々な立場の資源と連携し支援できる体制の整備が必要であると考えられ、今後は、特に教育関係者や保健・福祉関係者を含めた地域住民に対して広く情報発信し、協力体制を構築していく必要があると思われた。

がん診療連携拠点病院として、今後も患者・家族および医療関係者、地域へのサポートの提供および情報発信を行い、院内、院外、地域が協働して、がんになった「親」をおよびその「子ども」を含む「家族」を支えるしくみ作りをさらに推進したい。

E. 結論

がん患者の子どもへのサポートの拡充の

ため、Ⅰ. がん医療およびチャイルドサポートを提供する医療者の支援、Ⅱ. 患者(親)および子どもを含めた家族の支援、Ⅲ. 地域への情報発信、の大きく3つの側面から活動を展開してきた。がんになった(子育て世代の)「親」およびその「子ども」を含む「家族」に対して、診断・治療期からの継続的なサポートの提供が必要であるが、病院など一機関(施設)ができることは限られているため、今後も患者・家族および医療関係者、地域へのサポートの提供および情報発信を行い、院内、院外、地域が協働して、がんになった「親」をおよびその「子ども」を含む「家族」を支えるしくみ作りをさらに推進したい。

F. 研究発表

1. 論文発表
該当なし
2. 学会発表
 - 1) 井上実穂、谷水正人、菊内由貴、成本勝広、長尾美恵子:「親と死別する子どもへの心理的支援～子ども面接から見えてくるもの」第16回日本緩和医療学会学術大会. 平成23年7月30日. 北海道札幌市
 - 2) 大沢かおり、井上実穂、小林真理子、石田也寸志、小澤美和、真部淳:「がんになった患者の子どもへの病気説明に関する実態調査—その1 患者へのアンケート・量的分析」第16回日本緩和医療学会学術大会. 平成23年7月30日. 北海道札幌市
 - 3) 村瀬有紀子、井上実穂、茶園美香、大沢かおり、井上絵未、衛藤美穂、小林真理子、三浦絵莉子 小澤美和 石田

- 也寸志、真部淳：「がんになった患者の子どもへの病気説明に関する実態調査—その2 がん患者が病気を子どもに説明する背景」第16回日本緩和医療学会学術大会。平成23年7月30日。北海道札幌市
- 4) 井上絵美、村瀬有紀子、井上実穂、茶園美香、大沢かおり、衛藤美穂、小林真理子、三浦絵莉子 小澤美和 石田也寸志、真部淳：「がんになった患者の子どもへの病気説明に関する実態調査—その3 説明を受けた子どもの反応」第16回日本緩和医療学会学術大会。平成23年7月30日。北海道札幌市
- 5) 井上実穂：「親が終末期がん患者である子どものこころとその支援～親を看取る子どもを支える」第30回日本心理臨床学会総会秋季大会。平成23年9月2日。福岡県福岡市
- 6) 井上実穂、谷水正人、菊内由貴、増田春菜：「親ががんになったときの子どもへの関わり 中学生保護者の意識」第24回日本サイコオンコロジー学会総会。平成23年9月29日。埼玉県埼玉市
- 7) 清藤佐知子、井上実穂、菊内由貴、増田春菜、谷水正人：「親ががん患者である子どもに対する多職種チームによる取り組み」第49回日本癌治療学会学術集会。平成23年10月28日。愛知県名古屋
- 8) 井上実穂：「親ががん患者である子どもを支える～子どもに病状を伝えるということ～」第13回四国死の臨床研究会／第23回愛媛緩和ケア研究会。平成24年6月16日。愛媛県松山市。
- 9) 井上実穂、菊内由貴、清藤佐知子：「がんを家族にどう伝えるか 多職種によるチャイルドケアプロジェクト～子どもを抱える患者家族を支える～」第17回日本緩和医療学会学術大会。平成24年6月22日。兵庫県神戸市
- 10) 清藤佐知子、井上実穂、菊内由貴、谷水正人：「がんになった親をもつ子どもに対する支援（1）～医療者の意識調査～」第25回日本サイコオンコロジー学会総会。平成24年9月21日。福岡県福岡市
- 11) 井上実穂、清藤佐知子：「がんになった親をもつ子どもに対する支援（2）～母親が治療中である子どもへの関わり～」第25回日本サイコオンコロジー学会総会。平成24年9月21日。福岡県福岡市
- 12) 井上実穂、菊内由貴、清藤佐知子、村上琴映、兵頭静恵、福島美幸、佐伯京子、島田みちる、谷水正人：「がんになった親をもつ子どもに対する支援（3）～チャイルドケアプロジェクト『夏休みキッズ探険隊』」。第25回日本サイコオンコロジー学会総会。平成24年9月21日。福岡県福岡市
- 13) 清藤佐知子、井上実穂、菊内由貴、谷水正人：「がんになった親をもつ子どもに対する支援（1）～アンケート調査結果を踏まえて～」第50回日本癌治療学会学術集会。平成24年10月26日。神奈川県横浜市
- 14) 清藤佐知子、井上実穂、谷水正人：「がんになった親をもつ子どもに対する取り組み～チャイルドケアプロジェ

- クト～」第56回 愛媛乳癌疾患懇話会。
平成25年5月11日。愛媛県松山市
- 1 5) 井上実穂、清藤佐知子、菊内由貴、谷水正人：「親ががん患者である子どもへの支援～チャイルドケアプロジェクトの効果検証（1）～」第18回日本緩和医療学会
平成25年6月22日。神奈川県横浜市
- 1 6) 清藤佐知子：「がんになった親をもつ子どもに対する取り組み：チャイルドケアプロジェクト～治療期からのトータルケア～」第21回 日本乳癌学会学術総会。
平成25年6月27日。静岡県浜松市
- 1 7) 井上実穂、谷水正人：「親ががん患者である子どもへの心理教育プログラム『キッズ探検隊』の開発」第13回日本認知療法学会。平成25年8月23日。東京都豊島区
- 1 8) 清藤佐知子、井上実穂：「『子育て世代のがん患者』の支援～チャイルドケアプロジェクト～」第51回 日本癌治療学会学術集会。平成25年10月25日。京都府京都市
- 1 9) 井上実穂、宮内一恵、谷水正人：「院内全体で取り組むがん患者・家族への支援 チャイルドケアプロジェクト『夏休みキッズ探検隊』」第67回国立病院総合医学会。平成25年11月9日。石川県金沢市
3. その他の発表
講演
- 1) 井上実穂：「親ががん患者である子どものころとその支援」リレーフォーラ
イフ 2001 in えひめ。平成23年10月9日。愛媛県松山市
- 2) 井上実穂：「療育が必要な子どもたちと保育「親が病気である子どものころとその支援～トラウマにさせないために」」第17回日本保育保健学会。平成23年11月12日。岡山県岡山市
- 3) 井上実穂、谷水正人、菊内由貴、清藤佐知子、増田春菜：「四国がんセンターチャイルドケアプロジェクト」。厚生労働科学研究（がん臨床研究事業）推進事業：市民公開講座『小児がん患者・家族及び子育て世代のがん患者家族への支援を考える』。平成23年12月23日。東京都中央区
- 4) 井上実穂：「がん診療におけるチャイルドサポート 親を看取る子どもを支える ～終末期医療の現場から～」愛媛県がん診療拠点病院連絡協議会。平成24年1月13日。愛媛県松山市
- 5) 井上実穂：「親ががん患者である子どものころとその支援」厚生労働科学研究（がん臨床研究事業）推進事業：市民公開講座『子どものいのち 親のいのち～がん患者・家族を支える～』平成24年1月14日。愛媛県松山市
- 6) 清藤佐知子：「子どものために親ができること～乳がん検診の意義～」厚生労働科学研究（がん臨床研究事業）推進事業：市民公開講座『子どものいのち 親のいのち～がん患者・家族を支える～』平成24年1月14日。愛媛県松山市
- 7) 井上実穂：「親ががん患者である子どものころとその支援」平成24年5月13日。愛媛県松山市

- 8) 井上実穂:「親ががん患者である子どものこころとその支援」平成 24 年 5 月 13 日. 愛媛県松山市
- 9) 井上実穂:「がん患者家族支援～親ががん患者である子どもを支える～」. 平成 24 年 9 月 13 日. 愛媛県松山市
- 10) 井上実穂、谷水正人、菊内由貴、清藤佐知子、増田春菜:「親をがんで亡くす子どもの臨終前後のケ」. 厚生労働科学研究 (がん臨床研究事業) 推進事業: 市民公開講座. 平成 23 年 12 月 22 日. 東京都中央区
- 11) 井上実穂:「親ががん患者である子どものこころとその支援～病院での取り組み～」 厚生労働科学研究 (がん臨床研究事業) 推進事業: 市民公開講座『がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～』平成 25 年 1 月 12 日. 愛媛県松山市
- 12) 清藤佐知子:「乳がんとともに生きる」 厚生労働科学研究 (がん臨床研究事業) 推進事業: 市民公開講座『がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～』平成 25 年 1 月 12 日. 愛媛県松山市
- 13) 井上実穂:「親ががん患者である子どものこころとその支援」平成 25 年 3 月 7 日. 愛知県安城市
- 14) 井上実穂:「親ががん患者である子どものこころとその支援」平成 25 年 8 月 23 日. 高知県高知市
- 15) 井上実穂:「乳がん患者と家族を多職種で支える チャイルドケアプロジェクトの取り組み」平成 25 年 11 月 16 日. 愛媛県松山市.
- 16) 井上実穂:「親ががん患者である子どもの心とその支援～子どもに病気をどう伝えるか」平成 25 年 12 月 14 日. 鳥取県鳥取市
- 17) 井上実穂:「親ががんになったときの子どものサポート 拠点病院としての地域医療・教育機関との連携」 厚生労働科学研究 (がん臨床研究事業) 推進事業: 市民公開講座. 平成 25 年 12 月 21 日. 東京都中央区.
- 18) 井上実穂:「大切な人をなくした子どもたちを支える～心を癒す絵本の紹介～」 厚生労働科学研究 (がん臨床研究事業) 推進事業: 市民公開講座『つながるいのち～がん医療の現場から～』平成 26 年 1 月 11 日. 愛媛県松山市
- 19) 井上実穂:「親を看取る子どもへの支援～チームで支えるチャイルドケアプロジェクト～」平成 26 年 2 月 14 日. 徳島県徳島市
- その他
- 1) 院内パンフレット作成: 四国がんセンター チャイルドケアプロジェクト 「より安心して生活を送るために・・・お子さんがいらっしゃる患者さん・ご家族へ」
- 2) Hope tree フォーラム 2011 「子どもが大切な人と別れる時、私たちにできること～終末期がん患者・家族を支える～」 運営スタッフ: 平成 23 年 7 月 10 日. 岡山県岡山市、国際交流センター
- 3) m3.Com 学会レポート. 第 49 回日本癌治療学会学術集会ミニシンポジウム 「親が癌の子ども支援体制を～今年の春に、多職種で構成された Child Care Project を発足～」m3.平成 23 年 11 月

28日

山市総合コミュニティセンター

- 4) 日本サイコオンコロジー学会ニューズレター第71号(平成23年11月発行)施設紹介「四国がんセンター チャイルドケアプロジェクト」のご紹介. 日本サイコオンコロジー学会ニューズレター第71号(平成23年11月発行)
- 5) 医療関係者を対象とした講演会「がん診療におけるチャイルドケア～親ががん患者である子どものサポート～」開催:平成24年1月13日. 愛媛県松山市、四国がんセンター
- 6) 市民公開講座『子どものいのち親のいのち～がん患者・家族を支える～』開催:平成24年1月14日. 愛媛県松山市、愛媛県生涯学習センター
- 8) 「夏休みキッズ探検隊」開催:平成24年8月7日. 愛媛県松山市、四国がんセンター
- 9) 市民公開講座『がん患者の子育て支援～家族みんなの笑顔のために～』開催:平成25年1月12日. 愛媛県松山市、松山市総合コミュニティセンター
- 10) 医療関係者を対象とした研修・ワークショップ『看護に活かすチャイルドケア～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～』開催:平成25年6月9日. 愛媛県松山市、四国がんセンター
- 11) 「夏休みキッズ探検隊」開催:平成25年8月1日. 愛媛県松山市、四国がんセンター
- 12) 市民公開講座『つながるいのち～がん医療の現場から～』開催:平成26年1月11日. 愛媛県松山市、松

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得
該当なし
2. 実用新案登録
該当無し
3. その他
該当なし

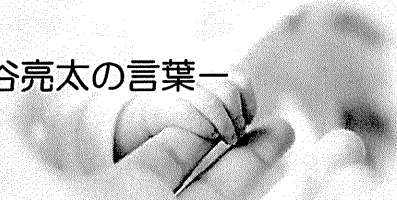
愛媛大学医学部附属病院・四国がんセンター共同企画

『子どものいのち 親のいのち』 ～がん患者・家族を支える～

第一部 映画上映会 9:30~12:00

がん患者家族サロンあいほっと(愛媛大学医学部附属病院)主催

映画『大丈夫。』
—小児科医・細谷亮太の言葉—



第二部 厚生労働科学研究(がん臨床研究)推進事業
市民公開講座 13:00~16:00

四国がんセンター 主催

I. 特別講演

「今伝えたい いのちの言葉」

聖路加国際病院 副院長・小児総合医療センター長
細谷亮太 先生

II. シンポジウム

- ・「親ががん患者である子どものこととその支援」
- ・「つながるいのち ~家族で向き合うがんと遺伝~」
- ・「子どものために親ができること~乳がん検診の意義~」
- ・「地域を支える相談支援センター」

日時 2012年1月14日(土)

9:30~16:00

(開場9:00)

場所 愛媛県生涯学習センター 県民小劇場

(松山市上野町甲650番地)

～裏面に会場案内図とプログラムを記載～

★入場無料/事前申込不要★

※お子様の参加は可能です。
※託児所はありません。

講演会のご案内

がん医療におけるチャイルドケア ～親ががん患者である子どものサポート～

謹啓

時下ますますご清祥の段、お慶び申し上げます。平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さてこの度、がん医療における家族ケアの一環として親ががん患者である子どものサポートに関する講演会を開催する事となりました。大変お忙しいところ恐縮ではございますが、万障お繰り合わせの上、多数のご参加をお願い申し上げます。

謹白

日時:平成24年1月13日(金) 18:30~20:00

場所:四国がんセンター 3階研修室

松山市南梅本町甲160 TEL:089-999-1111

【開会の挨拶】
座長

四国がんセンター 院長 新海 哲 先生
四国がんセンター 統括診療部長 谷水正人 先生

【特別講演】 親ががん患者である子どものこと ~小児科医の立場から~
(18:30~19:10) 聖路加国際病院 小児科 医長 小澤美和 先生

【講演 I】 親ががん患者である子どものサポートグループ
~CLIMBプログラムの実践について~
(19:10~19:30) 放送大学大学院 准教授 小林真理子 先生

【講演 II】 親を看取る子どもを支える ~終末期医療の現場から~
(19:30~19:50) 四国がんセンター 臨床心理士 井上実穂 先生

【質疑応答】
(19:50~20:00)



主催:ノバルティスファーマ株式会社
後援:愛媛県がん診療連携協議会

がん患者の子育て支援

～家族みんなの笑顔のために～

今、子育て世代のがん患者さんが増えています。

がん患者さんが安心して療養生活を送ることができるように、お子さんを視野に入れたご家族全体のサポートについて、様々な分野の専門家達を交え、皆さんと一緒に考えませんか？

司会/ 松本陽子 (NPO法人愛媛がんサポートおれんじの会 理事長)

がんの療養における

病院での現状と取り組み

【乳がんとともに生きる】

・清藤佐知子 (四国がんセンター 乳腺外科医師)

【親ががん患者である子どものころと

その支援～病院での取り組み～】

・井上実穂 (四国がんセンター 臨床心理士)

【親の気持ち、子どもの気持ち】

・中川好子 (がん経験者)

地域連携によるがん患者の子育て支援

【教育相談の現場から】

・中島珠実 (愛媛県総合教育センター 教育相談室指導主事)

【保健・福祉の立場から】

・藤原美佳 (愛媛県中予保健所 保健師)

【地域をつなぐサポートシステム】

・菊内由貴 (四国がんセンター 患者・家族総合支援室長)

ゲスト講演

【がんの親をもつ子どものサポートグループ】

・小林真理子 (放送大学准教授 臨床心理士)

日時 2013年
1月12日(土)
13:00～16:00
(受付 12:30～)

会場 松山市総合
コミュニティセンター
3階 大会議室

(愛媛県松山市湊町7丁目5番地)

★会場案内図を裏面に掲載

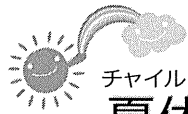
共催：公益財団法人日本対がん協会
愛媛県がん診療連携協議会

申込方法

参加ご希望の方は、
①郵便番号 ②住所 ③氏名 ④電話番号 ⑤参加人数を明記のうえ、はがき・FAX・Eメール・電話のいずれかにてお申し込み下さい。
★詳細は裏面をご覧ください。

お問い合わせ

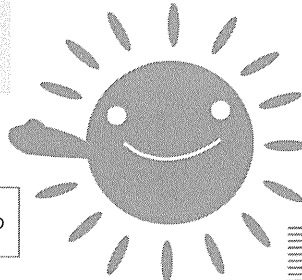
四国がんセンター・二室 TEL: 089-999-1111 (内線: 7483) 平日9:00～15:00



チャイルドケアプロジェクト Child Care Project 夏休みキッズ探検隊

愛媛県がん患者・家族支援推進事業

愛媛県では、がん患者の治療、療養が円滑に行われるために、子どもを含めた総合的支援に取り組んでいます。
このイベントは、親ががん患者である子どもが、同じ立場の仲間と出会うこと、がんに対する理解を深めること、医療関係者との関わりを持つことなどを通じて、病院や病気に対する怖さや不安を和らげ、さらには家族内のコミュニケーションの促進や、子どもが本来持っている困難を跳ね返す力を高めることを目的としています。



【対象】 小学1～6年生

四国がんセンターの患者さんのお子さんで、親ががんであることを知っており、イベントへの参加を希望していることが条件となります。

【定員】 12名

【日時】 平成24年8月7日(火) 13:00～16:30

【場所】 四国がんセンター

【内容】 ①がんについて学ぼう!

②病院内を探検しよう! など

※このイベントはお子さんのみの参加となっております。

【参加費】 無料

【申込方法】 申込書・アンケートにご記入の上、郵送または直接ご持参ください。

【応募〆切】 平成24年7月12日(木) 当日消印有効
(持参の場合は、当日17:00まで)

※ただし、定員に達し次第、締め切りとさせていただきます。

おうちの
親会!
かます!

病院探検:
出発だ〜!!

検査室で
こんなお
なんだ〜



* 申込書はがん相談支援・情報センターにあります

【申込み・問い合わせ (平日8:30～17:00)】

独立行政法人国立病院機構

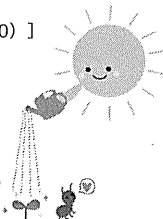
四国がんセンター

がん相談支援・情報センター

「夏休みキッズ探検隊」係

〒791-0280 愛媛県松山市南梅本町甲160

TEL: 089-999-1114 (直通)



看護に活かすチャイルドケア

～がん医療における子どもへの関わり方を学ぶ～

がん医療における子どもに対する関わり方について、チャイルドライフスペシャリスト (CLS)・医師・心理士から、その具体的な方法、技術を学ぶ研修・ワークショップです。

日時：平成**25**年**6**月**9**日(日)
9:30～16:30 (受付9:00～)

場所：四国がんセンター
地域医療連携研修センター3階研修室

CLSとは…

アメリカで取得できる専門資格で、発達心理学、家族学などを基礎に、医療環境にある子どもや家族に対して心理社会的支援を行う医療スタッフです。日本では30名ほどのCLSが活躍しています。(四国には不在)

内容：年齢に応じた子どもの病気や死に対する理解をもとに、子どもや家族に用いられるアクティビティ(工作など)の実習を行います。
事例検討、子どもへの心理教育プログラムの紹介など、現場に役立つ内容です。

講師：石田也寸志(愛媛県立中央病院 小児医療センター長)
井上 絵未(済生会横浜市東部病院こどもセンター CLS)
井上 実穂(四国がんセンター 臨床心理士)
村瀬有紀子(東京医科歯科大学附属病院 小児科 CLS)

◆事前申込み必要
(裏面をご参照ください)

対象：看護師、ほか職場で子どもと接する機会がある医療従事者

定員：先着50名

応募〆切：平成25年5月24日(金)

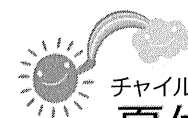
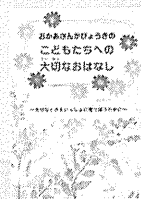
参加費：無料

お問い合わせ：四国がんセンター 患者・家族総合支援室
TEL 089-999-1111 (代表)
Mail kensyuh@shikoku-cc.go.jp
※メールにてお問い合わせの場合、件名を「チャイルドケア問合せ」として送信をお願いします。



独立行政法人国立病院機構

主催 四国がんセンター(患者・家族総合支援センター)

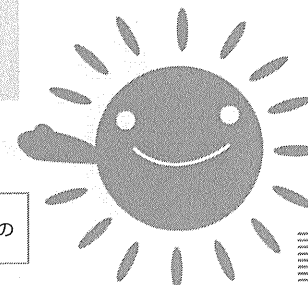


チャイルドケアプロジェクト Child Care Project

夏休みキッズ探検隊

愛媛県では、がん患者の治療、療養が円滑に行われるために、子どもを含めた総合的支援に取り組んでいます。

このイベントは、親ががん患者である子どもが、同じ立場の仲間と出会うこと、がんに対する理解を深めること、医療関係者との関わりを持つことなどを通じて、病院や病気に対する怖さや不安を和らげ、さらには家族内のコミュニケーションの促進や、子どもが本来持っている困難を跳ね返す力を高めることを目的としています。



【対象】 小学1～6年生

四国がんセンターの患者さんのお子さんで、親ががんであることを知っており、イベントへの参加を希望していることが条件となります。

【定員】 10名

【日時】 平成25年8月1日(木) 11:00～16:00 (受付10:30～)

【場所】 四国がんセンター

【内容】 ①がんについて学ぼう！
②病院内を探検しよう！など

※このイベントはお子さんのみの参加となっております。

【参加費】 無料

【申込方法】 申込書・アンケートにご記入の上、郵送または直接ご持参ください。

【応募締切】 平成25年7月19日(金) 当日消印有効
(持参の場合は、当日17:00まで)

※ただし、定員に達し次第、締め切りとさせていただきます。

おやつ
の
試食も
あります！

病院探検に
出発だ～!!

検査室って
こんなところ
なんだ～



*申込書は…患者・家族総合支援センターまたは、がん相談支援・情報センターにあります(病院HPからもダウンロードできます)

【申込み・問い合わせ(平日8:30～17:00)】

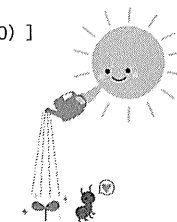
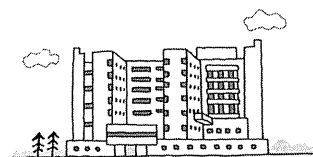
独立行政法人国立病院機構

四国がんセンター

患者・家族総合支援センターまたは、
がん相談支援・情報センター

「夏休みキッズ探検隊」係

〒791-0280 愛媛県松山市南梅本町甲160
TEL: 089-999-1209 (直通)



つながる いのち

～がん医療の現場から～

厚生労働科学研究(がん臨床研究)推進事業

共催：公益財団法人 日本対がん協会
愛媛県がん診療連携協議会
四国がんセンター

入場無料

日時

2014年 1月11日(土)
12:30～16:00(受付12:00～)

会場

松山市総合コミュニティセンター
3階 大会議室(松山市湊町7丁目5番地)

定員

250名(先着順)

プログラム

総合司会 四国がんセンター 清藤 佐知子 乳腺科医師

第一部 12:30～14:30 【映画上映】『うまれる』

第二部 14:50～16:00

【講演】「親ががん患者である子どものころ ～研究結果をふまえて～」
聖路加国際病院 小澤 美和 小児科医長

【対談】「子ども達と過ごした日々 ～経験者からのメッセージ～」
松山記念病院 大館 千恵 看護師
NPO法人愛媛がんサポートおれんじの会 松本 陽子 理事長

【講演】「大切な人をなくした子どもたちを支える ～こころを癒やす絵本の紹介～」
四国がんセンター 井上 実穂 臨床心理士

お問い合わせ
お申し込み

四国がんセンター・平松 平日13:00～17:00
TEL:089-999-1111(内線:7535)

☆詳細は裏面をご覧ください



映画上映

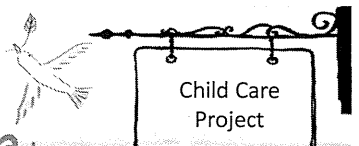
うまれる

ナレーション つるの剛士

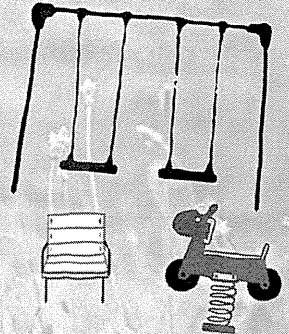
映画『うまれる』は、妊娠・出産・育児を通じて、私たちがうまれてきた意味や家族のあり方、そして“生きる”ことを考える、ドキュメンタリー映画です。見ていただいた方々の全細胞の隅々にまで、いのちのすごさが染みわたる、そんな映画にしたいと思い、毎日、魂を込めてつくってきました。ぜひ、ご覧ください。
(企画・監督・撮影 冨田トモ氏のコメントより)

お子さんがいらっしゃる患者さんへ

「お母さん、大丈夫かな」「お父さん、元気になるよね」



がんの治療はそれだけでも大きなストレスとなりますが、患者さんに子どもがいらっしゃる場合、その負担はより大きくなるといわれています。
また、子どもにとっても親の病気は大きな出来事です。子どもは、たとえ病気のことを聞かされていなくても、普段とは違った家族の様子に気づいているといわれます。子どものストレス反応は、年齢、性格、環境などによってはさまざまですが、周囲のサポートを得ながら、子どもはその困難を乗り越えて行く力を持っています。
当院では、患者さんができるだけ安心して療養生活を送ることができるように、それぞれのご家庭の状況に応じ、お子さんも視野に入れたご家族全体の支援をおこなっていきます。



何をしますの？

①大人(患者さん・ご家族)の方々へ

子どもに関する様々なご相談に対応します。子どもへの関わり方、気になる言動など、丁寧にお話を伺いながら、最善の支援体制を一緒に考えます。状況によっては、教育機関や小児医療、福祉施設との連携も視野に入れてサポートします。

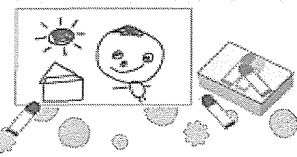
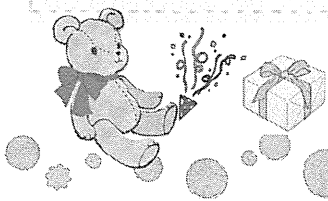
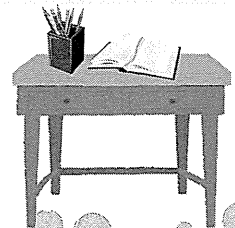
何をしますの？

②お子さんへ

遊びや会話を通して、子どもの考えや感じていることを引き出し、受け止めます。その上で、年齢に応じた病気の説明やストレスマネジメントなどの心理教育をおこないます。
また、院内探検などを通じて、病気に対する怖さを取り除き、子どもの持つ社会的な学習意欲を大切にします。

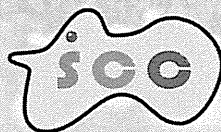
誰に言えばいいの？

がん相談支援・情報センター、または、病棟スタッフにお声かけください。子どもの心理、行動に詳しい臨床心理士などが対応します。



四国がんセンター
チャイルドケアプロジェクト

お子さんがいらっしゃる患者さんが
より安心して療養生活を
送ることができるように
ご家族全体のサポートを考える
プロジェクトです



Shikoku
Cancer Center

独立行政法人国立病院機構
四国がんセンター
がん相談支援・情報センター
〒791-0820 愛媛県松山市南梅本町甲160
TEL:089-999-1114 FAX:089-999-1115

より安心して生活を送るために…

お子さんがいらっしゃる患者さんへ



独立行政法人国立病院機構
四国がんセンター
チャイルドケアプロジェクト

Ⅲ. 研究成果の刊行に関する一覧表

研究成果の刊行に関する一覧表

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Watanabe S, Azami Y, Ozawa M, Kamiya T, Hasegawa D, Ogawa C, Ishida Y, Hosoya R, Kizu J, Manabe A.	Intellectual development after treatment in children with acute leukemia and brain tumor.	Pediatr Int.	53 (5)	694-700	2011
小澤美和	がん医療における家族ケア 小児がん患者の両親のメンタルヘルス	月刊腫瘍内科	8 (1)	18-23	2011
小澤美和	乳癌患者家族支援	乳癌診療 TIPS & TRAPS	9 (33)	25-26	2011
石田 也寸志, 渡辺 静, 小澤 美和 他	小児がん経験者の晩期合併症の予測は可能か 聖路加国際病院小児科の経験	日本小児血液・がん学会雑誌	49	31-39	2012
小澤美和、細谷亮太	小児科緩和医療—包括医療としての取り組み 小児緩和医療とは【世界の歩み・日本の歩み】	小児科診療	7 (11)	1111-1115	2012
小澤美和、細谷亮太	小児科緩和医療—包括医療としての取り組み 同胞・家族支援	小児科診療	7 (11)	1151-1155	2012
小澤美和	子どもを持つ患者のサポート 乳癌患者ケア	Gakken (東京)		311-320	2012
Takei Y, Ozawa M, Ishida Y, Suzuki SI, Ohno S, Manabe A.	Clinicians' perspectives on support for children with a parent who is diagnosed with breast cancer.	Breast Cancer		Epub ahead of print	2012
小澤美和	小児がん患者と家族および、子育て世代のがん患者とその家族の支援がんとその子どもたちの現状と支援	小児保健研究	72 (2)	217-219	2013
小澤美和	子育て中のがん患者とその子どもの心	がん看護	18 (3)	373-376	2013

研究成果の刊行に関する一覧表

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
阿佐美百合子, <u>小澤美和</u>	実践領域に学ぶ臨床心理ケーススタディ 臨床心理ケーススタディ 1)コアから思考する 医療 総合病院小児科領域の心理臨床	臨床心理学増刊号	5	82-87	2013
三井千佳, 山崎あけみ, 上別府圭子, <u>小澤美和</u> , 真部淳	思春期がん経験者のQOLと病気に関する自己開示	日本小児血液・がん学会雑誌	50 (1)	79-84	2013
武井優子, 尾形明子, <u>小澤美和</u> , 真部淳, 盛武浩, 平井啓, 鈴木伸一	小児がん経験者の病気のとらえ方の特徴と退院後の生活における困難との関連	行動療法研究	39 (1)	23-33	2013
<u>小澤美和</u>	医療者が知っておきたいがんサバイバーシップ 4.家族のサポート			88-94	2013
石田也寸志, 林三枝, 井上富美子, <u>小澤美和</u>	小児がん経験者の自立・就労に関する横断的実態調査	日本小児血液・がん学会雑誌		印刷中	2014
石田也寸志, 細谷亮太	小児がん治療後のQOL—Ericc 宣言と言葉の重要性—	日本小児科学会雑誌	115 (1)	126—131	2011
石田也寸志, 山口悦子, 堀浩樹, 他	小児急性リンパ芽球性白血病患者・家族のQOL アンケート調査—第1報	日本小児科学会雑誌	115 (5)	918-930	2011
石田也寸志, 山口悦子, 本郷輝明, 他	小児急性リンパ芽球性白血病患者・家族のQOL アンケート調査—第2報	日本小児科学会雑誌	15 (5)	931-942	2011
<u>Ishida Y</u> , Hayashi M, Inoue F, and <u>Ozawa M</u>	Recent employment trend of Childhood Cancer Survivors in Japan: A Cross-Sectional Survey.	International Journal of Clinical Oncology	(10.1007/s10147-013-0656-0)		
Asami K, <u>Ishida Y</u> , Sakamoto N	Job discrimination against childhood cancer survivors in Japan: A cross-sectional survey	Pediatrics Int	54 (5)	663-668	2012

研究成果の刊行に関する一覧表

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Ishida Y, Takahashi M, Maru M Mori M et al	Physician Preferences and Knowledge Regarding the Care of Childhood Cancer Survivors in Japan: A Mailed Survey of the Japanese Society of Pediatric Oncology.	Jap J Clin Oncol			2012
Higashi T, Yoshimoto T, Matoba M	Prevalence of Analgesic Prescriptions among Patients with Cancer in Japan: An Analysis of Health Insurance Claims Data	Global Journal of Health Science.	4 (6)	197-203	2012
Kojima KY, Kitahara M, Matoba M, Shimoyama N, Uezono S	Survey on recognition of post-mastectomy pain syndrome by breast specialist physician and present status of treatment in Japan. Breast cancer				2012
的場元弘	緩和医療薬学:疼痛マネジメント (編) 日本緩和医療薬学会	株式会社南江堂 (東京)			2013
Yamaguchi T, Shima Y, Morita T, Hosoya M, Matoba M	Clinical Guideline for Pharmacological Management of Cancer Pain: The Japanese Society of Palliative Medicine Recommendations	Jpn J Clin Oncol.	43 (9)	896-909	2013
的場元弘, 鳥越一宏	WHO ガイドライン 病態に起因した小児の持続性の痛みの薬による治療 第3章 薬による痛み治療の基本戦略 (編)World Health Organization	金原出版株式会社 (東京)		41-58	2013
的場元弘, 鳥越一宏	WHO ガイドライン 病態に起因した小児の持続性の痛みの薬による治療: 第4章 保健医療機関網における痛み治療へのアクセス改善を目指して (編)World Health Organization	金原出版株式会社 (東京)		59-66	2013
小林真理子	子どもたちのこころのサポートーサポートグループの実践から	Family Care	9 (10)	28-31	2011
小林真理子	子育て中のがん患者と子どもへの支援に関する研究ー子どもサポートグループの効果に関する検討ー	明治安田こころの健康財団助成発表論文集			2012
小林真理子	親のがんを子どもにどう伝え、どう支えるか	がん看護南江堂	18 (1)	57-61	2013

研究成果の刊行に関する一覧表

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
小林真理子	がん患者の子どもへのアプローチ In がんとエイズの心理臨床	誠信書房		49-55	2013
Otani H, Morita T, Esaki T, Ariyama H, Tsukasa k, Oshima A, Shiraisi K	Burden on oncologists when communicating the discontinuation of anticancer treatment.	Jpn J Clin Oncol	41	999-1006	2011
Yamamoto R, Otani H, Mastuo N, Shinjo T, Uno S, Hirose H, Matsubara T, Takigawa C, Maeno H, Sasaki K, Chinone Y, Ikenaga M, Morita T	Family-perceived usefulness of a pamphlet for families of imminently dying patients: a multicenter study.	Palliative Care Research	7	192-201	2012
Akechi T, Akazawa T, Komori Y, Morita T, Otani H, Shinjo T, Okuyama T, Kobayashi M	Dignity therapy: Preliminary cross-cultural findings regarding implementation among Japanese advanced Cancer patients	Palliat Med	26	768-769	2012
Otani H, Morita T, Uno S, Yamamoto R, Hirose H, Matsubara T, Takigawa C, Sasaki K	Effect of leaflet-based intervention for family members of terminally ill cancer patients with delirium: historical control study.	Am J Hosp Palliat Care		Epub ahead of print	2013

IV. 研究成果の刊行物・論文別刷

ご相談・ご質問がございましたら
直接 CLS か外来・病棟スタッフに
声をかけてください。

面談のお約束などは・・・
e-mail:
childlifespecialist@gmail.com

活動日： 平日 9 時～17 時半

～チャイルド・サポート メンバー構成～

小児科医師

チャイルド・ライフ・スペシャリスト

小児心理士

保育士

院内 PHS # 77201 (CLS)
77013 (小児科 小澤)

チャイルド・サポート のご案内



聖路加国際病院

お子さまをお持ちの患者様へ

「お母さんの具合はどうなの？」
「私が悪い子だから病気になってしまったの？」
「どうして抱っこしてくれないの？」

お父さん・お母さんの闘病はお子さんにとっても大きな出来事です。当院では大切な家族の一員としてお母さん・お父さんを支える子どもたちが、安心して毎日を過ごせるよう **チャイルド・ライフ・スペシャリスト** による支援を始めました。

Child Life Specialist (CLS)

チャイルド・ライフ・スペシャリストは一人ひとりの子どもとご家族の「病院経験」がよりストレスの少ない、主体的なものとなるように心理・社会的支援をおこなう専門の医療スタッフです。
1950年代より北米で普及してきた専門資格で、発達心理学・家族学・教育学などを基礎に病院などストレスの多い環境におかれた子どもの発達や、ストレスへの対処に関する専門的知識を習得しています。

何をしますの？

① 患者様ご自身への支援

お子さまに関する様々なご相談にお応えすることで、お父さま・お母さまの療養生活がよりストレスの少ないものとなるようサポートします。

病気と向き合う患者さまご自身の気持ちや、それぞれの家族の状況に応じて、お子さんにどのように話をしていくかなど、最善の支援体制と一緒に考えます。子どもの成長発達の専門知識を持つ小児科医も面談に加わり、一緒に考えることもあります。

また、お父さま・お母さまをはじめとご家族とのお話や、お子さんとの遊び・お話を通して表れるご家族のニーズを、必要に応じて医療スタッフに伝え、「子ども・家族中心ケア」の実践に努めます。



何をしますの？

② お子さまへの支援

大切な家族が特別な病気になってしまう事は、子どもの心身に大きな影響を及ぼす事があります。

CLS はお子さんとの遊びや会話を通し、お父さま・お母さまの病状や入院などの状況をお子さんがどのように感じているか、理解しているかを見極め、それをもとにご家族が、お子さんどのように過ごすことができるか、を考えるお手伝いをいたします。

お子さんが内に抱える様々な感情やストレスなども遊びを通して自然に表現し、お子さんなりに困難を乗り越える力を発揮できるように後押しをします



Hope Tree とは

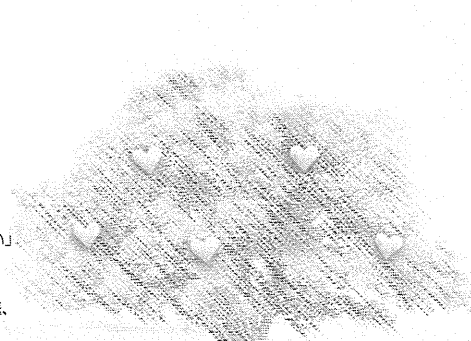
「成人医療の現場で子どもの存在を忘れてはいけない」
「子どもを含めた家族全体の支援が大切」

という視点を持った
チャイルド・ライフ・スペシャリストや小児科医、
子どもの心理を扱う現場で働く臨床心理士、
成人のがんを主に見ている看護師や、
医療ソーシャルワーカーにより
結成されたグループです。

病気になったとき、
ご自身またはご家族が
その病気と向き合い、受け入れることは
容易なことではありません。

がんという病気には家族の支えが必要で、
私たちはそのような家族を応援しています。

ご自身の病気に伴う薬療法
生活の変化による戸惑い等に
向き合うのに必要な、
それぞれのペースやタイミングを
大切にしたいと思っています。



親が
ご自身の病気と向き合っていくのに
さまざまな過程があるのと同じように

お子さんも
親の病気の受け止め方や、
気持ちの表現はさまざまです。

周囲の大人が
お子さんそれぞれの個性（発達や性格）を尊重して
適切にサポートできるよう
備えるための情報を提供しています。

私たちHope Treeプロジェクトは、
子どものレジリエンス
（人生で困難に直面した時に発する弾力、復元力）を
支援する活動を続けていきます。

パパやママが“がん”になったら

Hope Tree

厚生労働省 がん臨床研究事業
がん診療におけるチャイルドサポート研究班

子どもの気持ち

わたしが
悪い子だったから？

うつつちゃうのかな？

これから
どうなるの？



Hope Tree のもくじ

- 子どもだって知りたい (Kids Need Information Tool)
- 子どもは何を考えているの？
- 子どもががんを理解するの手伝う
- がんの親を持つ思春期の子どもへの支援
- 絵本リスト
- よくある質問

*欧米で活用されている本や資料の情報を翻訳したものや、
DVDなどをご紹介します。
今後は日本の現状を踏まえた情報を提供していきたいと思
います。また、資料は各医療機関などで印刷して配布
できるようにPDFファイルにしておりますので、
ご自由にご活用下さい。

<http://www.hope-tree.jp>

おとうさん
病気のなの？

どうして
一緒にお風呂に
入ってくれないの？

子どもの気持ち

どうして
お薬飲んでるの？

どうして
抱っこして
くれないの？

ぼくは
どうすればいいの？

いつ、おうちに
帰ってくるの？

ご寄付のお願い

Hope Tree は、がんになった親とその子どもにとって有益な情報を伝え、子ども
の生きていく力を支える活動を通して、困難に直面した親子を支える輪が広がる
ことを目的としています。そのために以下の活動を行っています。

- ①ホームページ (<http://www.hope-tree.jp>) による情報提供
 - ②がんの親をもつ子どものサポートの輪を広げるためのフォーラム開催
 - ③がんの親をもつ子どもの精神的健康を向上させるためのプログラムの開発・研究
 - ④がん患者の子どもに関する悩みの現状調査
 - ⑤がん患者とその子どもへのサポートに関する啓発活動
- これらの活動は、皆様方のご支援により運営しています。がんになった親子を支
える社会の実現を目指し、Hope Tree の活動が継続的に、円滑に進むために、
皆様方のご支援、ご協力の一環としてご寄付をお願いする次第です。

【金 額】 1口 1,000円から 何口でも可能です。
【振込先】 みずほ銀行 中目黒支店 普通2031927
【口座名】 Hope Tree (ホープツリー) *英語でもカタカナでも可
【Hope Tree 活動報告書の送付/お名前の掲載について】

寄付していただいた方には、その年度のHope Tree の活動報告書を送らせて
いただきます。また、Hope Tree 活動報告書 (ホームページから閲覧可) へお名前
を掲載させていただきます。Hope Tree のホームページ http://www.hope-tree.jp/hope_tree/ のお問い合わせフォームから、活動報告書送付希望の
有無と、お名前掲載希望の有無をお知らせください。

子どもの気持ちに寄り添うには

あなたの
気持ちを伝える

「あなたらしくすごしてくれることが
何よりうれしい」という気持ちなどを
伝え、子どもは安心できます。

ごまかしたり、うそをつくとなんとも
辛くなりますし、お子さんも疎外感
を持つことがあります。
お子さんの特徴や年齢に合わせた
お話をすると、親子の信頼関係が
深まります。

うそをつかない

誰のせいでも
ないことを伝える

自分のせいでは家族が病気になったと
感じる子どももいます。
誰のせいでもないことを伝えることで、
子どもの罪悪感を取り除くことが
できます。

→ 子どもを蚊帳の外におかず、ケアの輪に入れ、
「あなたもサポーターのひとりなんだよ」
ということを伝え子どもの自尊心を育てましょう。

思春期のお子さんの場合

思春期の子どもは、親に世話をしてもらうことを望む
一方で、自立しようともがいており、依存と自立の相反
する感情を同時に体験します。そのような時期に、親が
がんと診断されることによって、思春期特有の問題の他
に新たな課題を抱えることとなりますが、別の視点から
みると、新しい家族の関係を築きかけにもなります。

思春期の子どもは・・・

- ・ 親の病気に関する情報を欲しています
- ・ 自分の気持ちを表すのをためらうことがあります
- ・ 口に出さなくても、どうしたら親の役に立てるのかを
自分なりに考えている子どももいます

Copyright © 2014 Hope Tree. All Rights Reserved. 東京都目黒区中目黒 2-2-1-101 中目黒ビルディング 2F

詳細は
<http://www.hope-tree.jp>
ホームページを
ご覧下さい

→ 思春期の子どもは、十分
親をサポートできる存在で
あることを信じましょう。



Hope Tree

Hope Treeは

がんになった親を持つ子どもたちを前に戸惑っている方
たちに、子どもたちの持つすばらしい力を伝えます。子ども
たちは、どんなことを感じ、何を知りたいと思っているのか、
そして、どんなことをしたいと思っているのか。彼らのため
にできることが自然に見つけられるよう、子どもたちのこと
を知るための情報を提供するサイトです。

私たちが推し進める活動や有益な情報を、より多くの人に
知っていただき、がんになった親と子どもを周りで支える
ご家族、医療・教育・福祉の分野に携わる方などに活用して
もらうことで、子どもたちを支える輪が広がって欲しいと
願っています。

Hope Treeは厚生労働省科学研究費補助金 がん臨床研究
事業「がん診療におけるチャイルドサポート」研究班の
サポートを受けております。

Hope Tree ～パパやママががんになったら～
ホームページ <http://www.hope-tree.jp>

特集

がん医療における家族ケア

小児がん患者の両親の
メンタルヘルス*

小澤美和**

Key Words : childhood cancer, PTSS, parents, anxiety, depression

小児がんの特徴

小児がんの罹患率は成人と比較して非常に稀である。1996年米国の報告¹⁾では、330人の子どものうち1人が19歳までにがんに罹患するという。小児に発生しやすいがんは、中胚葉由来のものが多く、早期に全身に広がりやすい。一方で、その性質上、成人に多い外胚葉由来の腫瘍よりも抗がん剤の効果が期待できるので、集学的治療の進歩と、強力な治療に耐える子どもたちの努力により、小児がん全体の5年生存率は75%を超える²⁾まで向上した。しかしながら、15歳までの子どもの死因の第1位の疾病であることにかわりはなく、わが子が小児がんの診断を受けた両親は、子どもの命を脅かされる恐怖を感じ、動揺し混乱する。

このような小児がんの特徴を踏まえ、小児がんの両親のメンタルヘルスについて述べる。

両親の不安・抑うつ

幼い子どもを持つ家族は、わが子の将来のために生活スタイルを整えていくものである。そんな中、小児がんの診断は、それまで描いていた将来設計を大きく変更することを余儀なくされ、親・きょうだいなどすべての家族に大きな

影響を与える。まず、過酷な治療生活に適応するために、家族の役割を調整することが必要になるのだが、診断当初は、高い不安・抑うつ状態におちいる³⁾ので、家族の体制を整えるためには医療チームによる支えが特に必要である。このような両親の精神状態の悪化は、支援を行うことで軽減される⁴⁾ので、発病早期から、医療チームによる包括的に支援する体制が整えられることが望ましい。現状の理解・受け入れの過程に寄り添いながら、闘病生活の支えになる社会資源の情報提供などを行えるとよい。

また、発病当初の不安・抑うつは、数年で回復することや、このような反応は母親に強くみられるもので、父親の場合は治療のどの時期であってもさほど不安・抑うつは高くないという調査結果⁵⁾もある。しかし、個々の家族により状況は異なるので、誰が、また、どの家族が支援を特に必要としているかの判断が必要であり、スクリーニングのためにアセスメントツールが作成され、有用性が報告⁶⁾されている。

両親の心的外傷後ストレス症状

小児がんの両親が、長期に及ぶ闘病生活に順応していく様子は、心的外傷後ストレス症状(PTSS)として最も的確に概念化できることが報告⁵⁾されている。小児がん経験者の約6~10%の両親が重症~最重症のPTSSを呈しており、約20~40%は潜在的ではあっても中等度のPTSSを呈

し、特に侵入症状が強いという。

わが国においては、大園ら⁶⁾が、小児がん経験者の母親の21%、父親の22%にPTSSが認められたと報告している。父母ともに、特性不安が共通した関連要因であったこと、母親については、家族の役割分担機能が低く、発症後5年以内の方がPTSSが高いことを報告している。特に重度のPTSSを呈した母親は、状態不安との関連が優位であるという。

Shalerら⁷⁾は、小児がんの母親の苦痛を軽減するために問題解決型の介入を行い、問題解決の力を身につけることによって、子どもが病気になることに関する苦痛が軽減したと報告している。

Kazakら⁸⁾は、認知行動療法と家族療法(経験者、両親、きょうだい)を組み合わせた介入方法で、4つのセッションにより構成された週末1日の介入を行うことを試みた結果、介入群の本人でPTSSの過覚醒症状が軽減し、介入群の父親で再体験症状が軽減したことを報告している。

また、心的外傷後の成長が、経験者だけでなく、両親についても認められることが報告⁹⁾されている。これには、客観的な病気の重症度ではなく、どのくらい治療の過酷さや生命の危機を感じたかが関与していたという。

父親と母親の違い

小児がん患者の親は、わが子をがんにさせてしまった、という罪悪感にさいなまれる。特に、母親が育児の役割のほとんどを担っている場合が一般的であるから、日々の生活の中で何か気遣いが足りなかったことが原因だろうか、気づいたのが遅すぎたのではないかと父親以上に責任を感じ、さらには、がんになる体質を遺伝させてしまったのではないかと、肩身のせまい思いをしている場合もある。

一方、父親は、時間的にも空間的にも子どもと距離がある存在であることが多いために、疾患を受け入れる過程や情報の共有において孤立してしまうことが多い。そのためか、疾患の受け入れが困難で抑うつ状態になったり、ただひたすら子どもががかわいそうで仕事を手につかなくなったり、子どもの闘病生活と学業の両立を

目標高く強制したり、親子の時間の過ごし方に困惑したり、医療チームの中で一人特別な存在になりがちである。Kazakら¹⁰⁾は、父親のPTSSは、回避症状が強いことを特徴としてあげており、これは、現状に即した行動ができない父親がいることの理解を助ける報告といえる。

成長過程にある子どもにとっては、自立を促す父性と子どものそのままを受け入れる母性、双方のかかわりが必要である。そして、各家族によって父・母の役割はさまざまであるから、その家族における父、母それぞれの親としての気持ちをくみとり、双方の労をねぎらいながら、両親の存在は医療チームの中で重要であることを特に父親に実感してもらおうとよいだろう。しかしながら、父親は、面会時間が短いことが多いし、遅い時間や週末だけの面会のこともあり、なかなか多職種のサポートの手が届きにくい存在である。長期に及ぶ治療生活であるので、治療経過の節目に、両親そろって日中に来院してもらい、患児の治療の進行状況・生活面・学習面の様子などトータルな情報の共有を行い、チームの中で適切な職種が父親とのコミュニケーションを計り、父親をサポートする機会を作るとよいだろう。

子どもの病気・状態についての情報が共有でき、これまでに経験がない特殊な状況での子どもの心身の反応が理解できたら、徐々に親子で考え適切な対応を試みるように促していく。子どもの安楽と治癒を強く望む親のその場しのぎの対応ではなく、成長過程における困難を乗り越える成功経験となるよう、父性的・母性的それぞれの立場で取り組む姿勢を支えられるとよい。身体ケアの取り組みや内服の工夫、副作用がひどい時間のやり過ごし方などを医療者からの支持に受け身で従うだけではなく、現れる症状の理由を親子で理解した上で、積極的に自分に合った対応方法を見つけられるとよい。

家族機能

子どもが小児がん罹患するということは、その家族にとっての危機的状況である。子どもの生命にかかわる最大の危機に対応するために家族の力を十分に発揮ししなければならない。し

* Psychological distress in parents of childhood cancer.

** Miwa OZAWA, M.D., Ph.D.: 聖路加国際病院小児科(〒104-8560 東京都中央区明石町9-1); Department of Pediatrics, St. Luke's International Hospital, Tokyo 104-8560, JAPAN